

人生の棚卸し

秋篠宮さま“次男”という存在
不登校は親の責任じゃない

高橋大輔 単独インタビュー
ディズニー「ウィッシュ」

写真: 23.12.18 高橋大輔 単独インタビュー ディズニー「ウィッシュ」
高橋大輔 (左)、秋篠宮さま (中央)、次男 (右)

AERA

'23.12.18

No.59

アエラ
定価 470円



【巻頭特集】

50歳から「早めの終活」

アイドルグループ
Travis Japan



トットちゃんの通った「トモエ学園」のような「箕面こどもの森学園」。自分の好きな学科を選んだり、自分で学ぶ内容を決めることができる

いまこそトットちゃんが 必要だ

「子どもたちを信用している」ということです。こんな学校があるといういなと思いません」

実は「トモエ学園」に憧れて学校を創った人がいる。大阪府箕面市にあるオルタナティブスクール「箕面こどもの森学園」の校長で認定NPO法人「コクレオの森」代表理事の藤田美保さん(50)だ。

「学校が退屈だなど思っていた小3のときに『トットちゃん』を読んで、親に泣きながら『トモエ学園みたいな学校を探して!』と頼みました(笑)」

願いは叶わず、その後小学校の教員になる。しかし、教育観のベースにトットちゃんのトモ



映画「窓ぎわのトットちゃん」(全国東宝系で公開中)にはトモエ学園の校舎などが黒柳徹子さんも懐かしがるほどに再現されている
©黒柳徹子/2023映画「窓ぎわのトットちゃん」製作委員会

エ学園があったため、着任初日から学校現場に違和感を抱いた。「先生にも自由がなく、子どもたちにも自由がない。決められたことを決められたようにするしかない現実を突きつけられて」3年で教員を辞め、「大阪に新しい学校を創る会」に参加。2004年にメンバーたちと箕面市に「わくわく子ども学校」をスタートさせ、09年に「箕面こどもの森学園」と改称し、15年からは中学部も開校。北海道や奄美大島から移住して通う児童もいるほどの人気校だ。「箕面こどもの森学園」には決められた時間割はなく、子どもたちは自分で学びたいことを見つけ、自分で学習計画を作る。国語でも算数でも体育でも「好

きな学科からやってよい」という「トモエ学園」の学びそのものだ。自由度は高いが「決して好き勝手にすることではない」と藤田さんはいう。

「子どもを一人の人間として尊重し、対話をし、子どもの声から学びを創っていく。自分の声を大切にされた子は人の声も大切にできるようになります」

自らが創り手となる

同校の卒業生で現在ミュージシャンとして活躍する沼尾翔子さんは、小3から2年間の不登校を経て、母に連れられてやってきた。「トットちゃんとお母さんみたいですよ」と藤田さんは振り返る。

「彼女は音楽の時間に、先生が決めた曲を先生が決めたように歌うことが嫌だったようです。ここで『自分の好きな音楽が好きにやっていたらいいんだ』と知ることができたことはこの学校での学びの一つだったと思います」

いま小中学生の不登校児童生徒数は29万9048人。(22年度、文科省発表)。そうした子どもたちを受け入れるオルタナティブスクール(フリースクールを含む)は全国に500以上あると言われる。藤田さんは言う。

「リーマン・ショックやコロナ禍などで人々の価値観が大きく変わり、日本の教育が行き詰ま



木エや手芸、動物の生態など興味のあることを計画して行う「プロジェクト」。自主的な学びが生まれていく

っていると感じる人が増えている。いまは不登校児に限らず積極的にオルタナティブスクールを選ぶ保護者も多いんです」

多様な子どもたちの「居場所」としての機能はあるが、しかしそれだけではないと言う。「学校とは、自らが創り手となる学びの場だと思おうのです。良い学びとは一人一人が自分で決めて、自分で創っていくもので、それを大人がサポートすることで、子どもたちが育っていく。トモエ学園はそれを実践していた場所で、例えばアルコールラップで実験ばかりしていた男の子は日本を代表する物理学者になった。小林宗作先生には本来の学びとはこういうものだという理念があったと思います」

いまこそ、トットちゃんに学ぶことは多いのだ。

フリーランス記者 中村千晶